

現状を否定してみよう

あんがいそこによい着想が……

現状を否定してみようといっても、現状に反対しての否定ではない。よい着想を発想する有力な1つの手段として、みずからの思考の中で現状を否定してみようということである。この現状否定は、一般の通念と考えられていること、あるいは、常識と考えられていることを否定してみることと同義であり、要は物の逆を考えてみようということである。

はなはだ失礼ながら、標題および執筆者の名前は忘却したが、2～3カ月前の日経新聞夕刊「あすへの話題」のコラムに、つぎのような内容の記事があった。すなわち、その記事の内容は、最近地方の町並みでの夜の店じまいの早さからくるもの寂しさをかこつけたものであったと記憶している。ここで取り上げようとするのは、その記事のひとつである。

ある商店に婿入りした若主人、商売繁盛の方策について、あれやこれやと思考をめぐらす。店舗の模様ええ、商品の陳列方法の変更等々打つ手は多々あろう。しかしなんといってもお客さんの所要を満たしてやるのが大事である。現在は、午後八時閉店は常識である。八時以降に所要のおきたお客さんは困るだろう。ひとつ午後十時まで店を開けておこう、というのがこの若主人がとった決心である。その店は、午後十時までこうこうとして明るく、常識からみた異状は、多くの顧客の興味と関心をよんだのであろうか、大いに繁盛したというお話である。

ところで、このお話を引用した狙いは、常識からみて異状であることが望ましいことであるとか、あるいは、周囲からきわだたせることがよいとかを主張したいためではない。午後八時閉店という一般通念を打破って、午後十時閉店という閉店時刻の選択問題として問題をとらえた発想方法を強調したかったからにほかならない。このように、一般には常識と考えられていることも、これを否定した立場に立ってみることによって、あんがい思いもよらなかったいい着想を見いだすことが多いようである。

かけだしORマンである私は、よくこの手を使っている。与えられた問題が漠然としていて、真に解決をはかべき問題が何であるのか明らかでないことがよくある。このようなとき、現在行なっているある部門の仕事をやめてみたら、あるいは、現在やっているやり方の逆をやってみたら、いったいどのような不都合や不具合が起きるだろうかという視点から調べてみる。問題に関連をもつ当事者たちは、それに対していろいろ具体的反応を示してくる。そこから、あんがい手取り早く、真に解決を要するポイントとかその解決方向について、具体的情報を手に入れることができる場合が多い。このように逆を考えてみるという考え方は、比較に値する代替案を見いだしたり、あるいは、問題の構造を具体化するときにも有用であるようだ。

ところで、かつて、研究組織の在り方を討議する会議に出席したことがある。その席上研究行政を司るある部門を組織構成の中で廃止するかどうかが議論の焦点となった。廃止に賛成するグループと、反対するグループとの二手にわかれて、それぞれもっともらしい理由を並べた。議論はいつ果てるとも知れない状況であった。そこで、「今議論の焦点となっている組織をなくしてみたら、研究行政実行のうえでいったいどのような不具合が具体的に起きるのか。また、その不具合を吸収する他の方法にどんなものがあるかを考えてみたらどうか。」と提案してみた。その組織を廃止したとしてみたとき、不具合さについてより具体的情報が得られて、いつ果てるともしれない議論も終焉させることができるだろうと考えたからである。しかし、ことは私の意図した方向と逆の方向に発展してしまった。組織の存続に重大な関心をもつグループは、私とその組織廃止派と同意見であると理解したらしい。感情も交えた猛烈な抵抗を受け、結局は今後も存続ということで幕となった。鉄も使いようよくいわれるが、うまく使わないと薙蛇となるようだ。あるいは、表現技術のまずさのせいであったか。

(マグマ)